

# 大学生の運動系部活動における動機づけと心理的欲求の充足の関係

村瀬 俊樹

## Relationships between the motivations in the sports club activities and the psychological needs satisfaction in university students

Toshiki Murase

大学生の運動系部活動における動機づけに、自律性への欲求の充足、有能さへの欲求の充足、部員との関係性への欲求の充足がどのように関係しているのか、そして、それは学年によって変化するかどうかを検討した。内発的動機づけに対して、自律性への欲求の充足と統制的有能感への欲求の充足が正の関連性を持つことが、学年にかかわらず認められた。一方、学年による違いとして、1年生では、内発的動機づけに部員から受容されることへの欲求の充足が正の関連性を持つが、上級生では認められなかった。逆に、自己有用感や身体的有能感といった部の活動内容に直結した欲求への充足と内発的動機づけとの正の関連性が、1年生では見られなかったが、上級生では見られた。これらの結果は、自己決定理論の考え方を支持しているとともに、集団に参加する年月によって動機づけと心理的欲求の充足との関係が変化することを示している。

キーワード：内発的動機づけ、大学生、自己決定理論、自律性、有能感、関係性

大学生のサークルや部活動への加入率は減少傾向にあるが（横山, 2012）<sup>1)</sup>、近年でも運動系サークル・部活動に30%程度の学生が加入していると報告されている（日本学生支援機構, 2017）<sup>2)</sup>。サークルや部活動は、学生たちが自分たちで運営している側面が強く、学生たちの所属意識が強いことも報告されている（高木, 2006）<sup>3)</sup>。このようなサークル・部活動に対して学生がどのような動機づけで参加をするのかということは、サークルや部活動を運営する学生自身にとって関心の深いことであると思われる。本論では、大学生における運動系部活動に対する動機づけを取り上げ、それに関係する要因について、心理的欲求の充足の観点から検討する。

動機づけを内発的動機づけと外発的動機づけに区別して論じてきた従来の研究に対し、自己決定理論では、外発的動機づけの中にもいくつかの調整の仕方があると考え、どの程度その調整が自律的であるかによって、4つの動機づけのタイプを想定している（Ryan & Deci, 2002）<sup>4)</sup>。

最も自律性の低い調整の仕方は外的調整であり、これは外的報酬を得たり罰を避けるよう動機づけられているものである。外的調整よりは自律性の高いものとしては、取り入的調整が想定されている。これは、恥ずかしさを避けたり自尊心

を維持できるよう動機づけられているものである。さらに自律性の高いものとしては、同一化的調整が想定されている。これはその活動が自分にとって重要であり価値あるものであると受け止められており、ある目的のために重要であるから行動するよう動機づけられているものである。そして、外発的動機づけの中で最も自律性の高い調整としての統合的調整は、活動そのもの以外のことに目的があるので外発的動機づけではあるが、十分に自分の価値観や欲求と統合されているものとして考えられている。

自己決定理論では、外発的動機づけにおける外的調整、取入的調整、同一化的調整、統合的調整、そして内発的動機づけという様々な動機づけのタイプを、自律性の低いものから高いものへと順に想定しており、人が様々な活動を行う際の動機づけを多角的に分析することを可能にしている。

では動機づけが自律的なものになるには、どのような要因が関わっているのだろうか。自己決定理論では、人間には3つの心理的な基本欲求が備わっていることを仮定している。自分の意思で自律的に自分の行動を選択したいという自律性への欲求、自分自身の能力を生かして環境に効果的に働きかけたいという有能さへの欲求、他者と関係や結びつきを持ちたいという関係性への欲求であ

る。人間は常にこの3つの心理的な欲求を満たしたいと思っており、この欲求が充足されているときに内発的に動機づけられるとされている。

ところで、関係性への欲求を問題とするとき、大学生においてはどのような他者との関係性を問題とするべきであろうか。大学生は、それまでの時期と比べて、親との間では信頼・承認される度合いが増大し、親から自立した関係になっていく(落合・佐藤,1996a)<sup>5)</sup>。また、友人との関係では、消極的同調傾向が減少し積極的に相互理解しようという傾向が強まる(落合・佐藤,1996b)<sup>6)</sup>。これらのことを考えれば、大学生は、様々な人と対人関係を構築しているものの、同世代の人々との関係が重要になっている時期と考えられる。したがって、部活動への動機づけを検討する際、同じ部に所属している他の部員との関係がよいものとして構築されていると感じているかどうかを検討することが必要であると考えられる。

以上のことから、本論文では、運動系部活動の動機づけに自律性への欲求、有能さへの欲求、部員との関係性への欲求という3つの心理的欲求の充足がどのように関係しているのかについて、筆者の指導の下に行われた2つの卒業研究(岩崎,2017;植島,2014)<sup>7)8)</sup>の結果をもとに考察する。

## 植島の研究

植島(2014)は、運動系部活動への動機づけと部員との関係性への欲求の充足が関連性をもつかどうか検討した。

## 方法

### 調査協力者

運動系の部活動をしている島根大学1~4年生に対して質問紙調査を実施した。1年生16名(男性13名、女性3名)、2年生9名(男性8名、女性1名)、3年生8名(男性7名、女性1名)、4年生19名(男性16名、女性3名)、計52名(男性44名、女性8名)が調査協力者となった。

### 質問項目

質問項目は練習への動機づけ、部員との関係性への欲求の充足、理想とする部員との関係に関する項目から構成されていた。本論では理想とする部員との関係に関する項目の分析は割愛し、練習への動機づけと部員との関係性への欲求の充足に関する部分についてのみ述べることにする。

**練習への動機づけ** 錦見(2011)<sup>9)</sup>が使用した学習への動機づけに関する項目について補足修正し、内発的動機づけ(出来るようになるのがうれしいからなど)、同一化的調整(練習したことが

将来役に立ちそうだからなど)、取入的調整(周りから上手いと思われたいからなど)、外的調整(周りからやれと言われるからなど)にあたる12項目を作成し使用した。回答は、「全くあてはまらない」~「非常にあてはまる」の6件法で行った。

**部員との関係性への欲求の充足** 大学生において同年代の人々との間で関係性への欲求を満たす要因として受容感と自己有用感があると考えて質問項目を作成した。集団の他のメンバーから受け入れられているという受容感、どのような集団においても重要であると考えられるが、部活動のような家族以外の集団においては、その集団において自分が他のメンバーに対して果たしている役割についての意識が重要となると考えられ、自己有用感も問題とする必要がある。以上の考えから、錦見(2010)が使用した親からの受容の測定項目に加えて、石本(2008)<sup>10)</sup>が使用した居場所感尺度の自己有用感に関する項目について、補足修正をした25項目を作成し使用した。回答は、「全くあてはまらない」~「非常にあてはまる」の6件法で行った。

質問は練習への動機づけ、部員との関係性への欲求の充足、理想とする部員との関係の順であった。

## 結果

各質問項目はすべて、「全くあてはまらない」1点~「非常にあてはまる」6点として得点化した。

### 練習への動機づけ

調査協力者52名のデータを用いて主因子法による因子分析を行った。固有値1以上の基準では3つの因子が抽出されたが、第2因子から第3因子にかけて説明率が大きく減少したため因子数を2として再度因子分析を行った。プロマックス回転後の因子負荷量を表1に示す。第1因子は「技術が向上することが楽しいから」、「出来るようになるのがうれしいから」など、内発的動機づけに該当する項目が高い負荷量を示していた。よって内発的動機づけ因子と命名した。第2因子は「練習しておけば周りから文句を言われたいから」、「周りに真面目に取り組んでいると思ってほしいから」など外的調整と取入的調整に該当する項目が高い負荷量を示していた。よって外的・取入的調整因子と命名した。

内発的動機づけ因子に0.6以上の因子負荷量を示す3項目の得点の平均値を内発的動機づけ得点とした。外的・取入的調整因子に0.6以上の因子負荷量を示す4項目の平均値を外的・取り入れ調整得点とした。

部員との関係性への欲求の充足

調査協力者 52 名のデータを用いて主因子法による因子分析を行った。固有値 1 以上を基準として 4 因子が抽出された。プロマックス回転後の因

子負荷量を表 2 に示す。

第 1 因子は「部員と楽しい時間を共有している」、「部員といるとリラックスできる」などに高い負荷量を示していた。よって安心感因子と命名

表 1 練習への動機づけの因子分析結果 (因子負荷量)

	内発的動機付け	外的・取り入れの調整
技術が向上することが楽しいから	0.77	-0.08
出来るようになるのがうれしいから	0.67	-0.06
そのスポーツをすること自体が楽しいから	0.66	-0.34
身につけたい大切なことだから	0.55	0.34
練習したことが将来役に立ちそうだから	0.41	0.02
広い意味での運動能力を高めることだから	0.41	0.04
技術が低いことでみんなに嫌われたくないから	0.41	0.32
練習しておけば周りから文句を言われないから	-0.24	0.90
周りからやれと言われるから	-0.34	0.67
周りに真面目に取り組んでいると思ってほしいから	0.30	0.61
周りに結果を求められるから	0.04	0.60
周りからうまいと思われたいから	0.53	0.59
固有値	3.39	3.06
説明率	28.27%	25.49%
因子間相関		-0.01

表 2 部員との関係性への欲求の充足の因子分析結果 (因子負荷量)

	安心感	自己有用感	被受容感	被承認感
部員と楽しい時間を共有している	0.90	-0.17	-0.26	0.22
部員といるとリラックスできる	0.80	0.08	0.17	-0.15
部員といると気持ちが安らぐ	0.77	0.07	0.08	-0.05
部員といるとほっとする	0.74	0.06	0.22	-0.06
部員といると癒される	0.74	-0.09	0.21	-0.04
部員の前ではありのままに自分を出せている	0.69	0.22	-0.38	0.21
部員といると落ち着く	0.65	-0.01	0.32	0.04
部員といると居心地が良い	0.48	0.00	0.34	0.20
部員は普段から私の気持ちを理解している	0.47	0.01	0.34	0.15
部員は私の心の支えである	0.40	-0.10	0.34	0.19
部員から期待されている	-0.25	0.96	0.14	-0.05
私がいないと部員が困る	0.19	0.82	-0.06	-0.23
部員から相談を持ちかけられる	0.07	0.78	-0.12	-0.15
部員から必要とされていると感じる	0.16	0.76	-0.36	0.37
部員の役に立っていると感じる	0.06	0.52	0.25	-0.03
部員から信頼されている	-0.31	0.51	0.38	0.21
部員から関心を持たれている	0.39	0.44	0.33	-0.30
部員に意見を認めてもらえる	0.15	0.37	0.31	0.15
部員は私の立場を理解している	0.00	0.03	0.84	-0.13
部員から心を開かれている	0.07	-0.12	0.80	0.05
部員に受け入れられている	0.01	0.06	0.72	0.22
部員は私の話を聞いてくれる	0.11	-0.26	-0.04	0.90
部員は私の意見を尊重してくれる	0.01	0.17	0.27	0.57
部員は私の気持ちを受け止めてくれる	0.28	0.01	0.18	0.49
部員から認められていると感じる	0.04	0.28	0.28	0.36
固有値	14.39	2.04	1.24	1.05
説明率	57.55%	8.14%	4.97%	4.19%
因子間相関		安心感		
		自己有用感	0.60	0.62
		被受容感	0.73	0.58
			0.72	0.66

した。第2因子は「部員から期待されている」、「私がないと部員が困る」などに高い負荷量を示していた。よって自己有用感因子と命名した。第3因子は「部員から受け入れられている」、「部員から心を開かれている」などに高い負荷量を示していた。よって被受容感因子と命名した。第4因子は「部員は私の話を聞いてくれる」、「部員は私の意見を尊重してくれる」などに高い負荷量を示していた。よって被承認感因子と命名した。安心感因子に因子負荷量0.6以上を示した7項目の得点の平均を安心感得点とした。自己有用感因子に因子負荷量0.6以上を示した4項目の得点の平均を自己有用感得点とした。被受容感因子に因子負荷量0.6以上を示した3項目の得点の平均を被受容感得点とした。被承認感因子に因子負荷量0.6以上を示した項目は1項目であったため、因子負荷量0.57を示した項目も含めて2項目の得点の平均を被承認感得点とした。

#### 練習への動機づけと部員との関係性への欲求の充足との関連性

練習への動機づけの2つの尺度得点と、部員との関係性への欲求の充足の4つの尺度得点との関係についてピアソンの相関係数を算出した。その結果、内発的動機づけ得点と被受容感得点、被承

認感得点に有意な正の相関がみられた。外的・取り入れ的調整得点と部員との関係性への欲求の充足の4つの尺度との間には有意な相関はみられなかった(表3)。

#### 学年別にみた練習への動機づけと部員との関係性への欲求の充足との関連性

まず、各尺度の得点が学年によって異なるのかどうか検討した。3・4年生をまとめて分析することとし、1年生16名(男性13名、女性3名)、3・4年生27名(男性23名、女性4名)を分析対象とした。2年生は人数が少なかったので分析しなかった。各尺度得点について学年による1要因分散分析を行ったところ、いずれの尺度得点も学年の主効果は見られなかった(表4)。

次に、練習への動機づけと部員との関係性への欲求の充足との関連性について、ピアソンの相関係数を1年生と3・4年生それぞれについて算出した。1年生については、内発的動機づけ得点と安心感得点、被受容感得点の間に有意な正の相関がみられ、外的・取り入れ的調整得点と被受容感得点に有意な負の相関がみられた。3・4年生については、内発的動機づけ得点と自己有用感得点との間に有意な正の相関がみられた(表5)。

表3. 動機づけと関係性への欲求の充足との関連性(ピアソンの相関係数)

	内発的動機づけ	外的・取り入れ的調整
安心感	0.26	-0.19
自己有用感	0.25	0.18
被受容感	0.38**	-0.08
被承認感	0.37**	-0.19

\*\* $p < .01$

表4. 動機づけ各尺度、関係性への欲求の充足各尺度の学年別平均(標準偏差)

	1年生	3・4年生
内発的動機づけ	5.19 (0.78)	5.19 (0.82)
外的・取り入れ的調整	2.88 (1.28)	2.77 (1.17)
安心感	4.24 (0.88)	4.30 (1.10)
自己有用感	3.27 (0.88)	3.67 (1.11)
被受容感	4.13 (0.72)	4.12 (1.02)
被承認感	4.66 (0.81)	4.43 (0.88)

表5. 学年別 各動機づけ尺度得点と各心理的欲求の充足得点との相関係数

	内発的動機づけ		外的・取り入れ的調整	
	1年	3・4年	1年	3・4年
安心感	0.51*	0.15	-0.46	-0.10
自己有用感	-0.17	0.43*	0.18	0.14
被受容感	0.64**	0.27	-0.64**	0.12
被承認感	0.43	0.37	-0.42	-0.24

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

## 考察

自己決定理論で想定しているように、大学生の運動系部活動においても、他者との関係性への欲求の充足が部活動への動機づけを内発的なものにしていくという関係が見いだされた。ただし、こういった関係性への欲求の充足が内発的動機づけと関係しているのかについては、学年による違いが見られた。1年生においては、被受容感や被承認感のように、他者から与えられる側面が強い関係性の欲求の充足が関係しているが、3・4年生になるとそれらとの関連性は見られなくなり、部の活動の目的に照らして自分が他者に対して与えることができているという側面の強い自己有用感への欲求の充足が内発的動機づけと関連している。入部して時間があまり経過しておらず、中心的に部を運営しているわけではない1年生においては、まず他者から与えられて成り立つ側面の強い関係性への欲求が充足されていることが活動への動機づけを内発的なものとするが、3・4年生となって部を中心に運営するようになると、部の目的に照らして他者に対して自分が与えることができているかどうかという観点からの関係性への欲求が満たされることが、部活動への動機づけを内発的なものにするようにと変化するのであろう。

## 岩崎の研究

植島(2014)は、大学生の運動系部活動における動機づけと部員との関係性への欲求の充足が内発的動機づけと関連していることを明らかにした。しかしながら、自己決定理論では、関係性への欲求の充足だけでなく、自律性への欲求の充足、有能さへの欲求の充足が動機づけを規定していると考えられており、これら3つの欲求の充足と動機づけとの関係を総合して検討する必要がある。

藤田・杉原(2007)<sup>11)</sup>はスポーツ文脈において各心理的欲求が各調整スタイルに及ぼす影響を検討した。ただし、藤田・杉原(2007)では各心理的欲求について、その下位尺度は想定せず、それぞれを1つの尺度で測定して調査を行っている。しかし、植島(2014)が関係性への欲求の充足において4つの因子を見出したように、他の欲求の充足についても、こういった因子が見出されるのかを検討したうえで動機づけとの関係を検討する必要があるだろう。

特に、有能さへの欲求については、伊藤(1986)<sup>12)</sup>では他者との比較を通じた自己の身体的能力の認知である身体的有能感と、自己の努力や練習によって結果をどの程度コントロールでき

ると認知しているかを示す統制感の二つの側面があることを明らかにしており、こういった因子が見出されるかどうか検討したうえで動機づけとの関係を検討する必要がある。

また、植島(2014)では、動機づけと関係性への欲求の充足との関係について、学年による違いが検討され、1年生では安心感や被受容感が内発的動機づけと正の関連性をもつが、4年生では自己有用感と内発的動機づけが関連性をもつようになることを明らかにした。岩崎(2017)においても、自律性への欲求、有能さへの欲求、関係性への欲求が動機づけとどのような関連性を持つのかについて、学年による違いが見出されるのかどうか検討した。

## 方法

### 調査協力者

運動系部活動に所属している島根大学1～4年生74名(女性16名、男性58名)が質問紙調査の協力者となった。調査協力者の内訳は、1年生29名(女性5名、男性24名)、2年生21名(女性6名、男性15名)、3年生16名(女性4名、男性12名)、4年生8名(女性1名、男性7名)であった。

### 質問項目

質問項目は、部活動への動機づけ(12項目)、自律性への欲求の充足(8項目)、部員との関係性への欲求の充足(11項目)、有能さへの欲求の充足(10項目)に関する質問項目から構成された。

部活動への動機づけに関する質問項目は、植島(2014)を参考とし、なぜ部活動をしているのかについて尋ねた12の質問項目について、「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。自律性への欲求の充足については、藤田・杉原(2007)、および、井上・岡澤(2009)<sup>13)</sup>を参考とし、行っている部活動(練習や試合)について、自分自身にどの程度あてはまるかについて尋ねた8項目について、「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。有能さへの欲求の充足については、藤田・杉原(2007)、および、伊藤(1986)を参考とし、10項目について、「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。部員との関係性への欲求の充足については、植島(2014)が用いた関係性尺度から11項目を使用し、部員といるときのどのように感じるかについて、「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。

質問は部活動への動機づけ、部員との関係性への欲求、部活動に関する有能感への欲求、部活動

に関する自律性への欲求の順であった。

## 結果

以下の分析においては、各質問項目の回答を、「まったくあてはまらない」を1点～「非常にあてはまる」を6点と得点化した。

### 部活動への動機づけ

調査協力者74名のデータを用いて主因子法による因子分析を行った。固有値1以上を基準として4因子が抽出され、プロマックス回転をしたところ、第1因子は主に内発的動機づけに関する質問項目として想定した質問項目が高く負荷していたが、「周りから上手いと思われたいから」という質問項目も高く負荷していた。この項目を除外した11項目で再度主因子法による因子分析を行った。プロマックス回転後の因子負荷量を表6に示す。

第1因子は「技術が向上するのが楽しいから」などの内発的動機づけに関する項目が高い因子負荷量を示しており、内発的動機づけ因子と命名した。第2因子は「周りからやれと言われるから」

など外的調整に関する項目が高い因子負荷量を示しており外的調整因子と命名した。第3因子は「休んでしまうとみんなに迷惑をかけてしまうから」など取り入れ調整に関する項目が高い因子負荷量を示しており、取り入れ調整因子と命名した。

内発的動機づけ因子に0.6以上の因子負荷量を示した3項目の得点の平均を内発的動機づけ得点とした。外的調整因子に0.6以上の因子負荷量を示した3項目の得点の平均を外的調整得点とした。取り入れ調整因子に0.6以上の因子負荷量を示した2項目の得点の平均を取り入れ調整得点とした。

### 自律性への欲求の充足

調査協力者74名のデータを用いて因子分析を行った結果、固有値1以上を基準として2因子が抽出されたが、第2因子へは「監督や部長に意見を言うことはあまりない」のみであった。この項目を除外した7項目で再度因子分析を主因子法で行ったところ1因子が抽出された。この因子に因子負荷量0.6以上を示した3項目の得点の平均を自律性得点とした(表7)。

表6. 動機づけに関する質問項目の因子分析結果(因子負荷量)

	内発的動機づけ	外的調整	取り入れ調整
技術が向上するのが楽しいから	0.89	0.03	-0.12
出来るようになるのがうれしいから	0.82	-0.11	-0.02
そのスポーツをすること自体が楽しいから	0.71	-0.20	0.06
趣味や特技として身につけておきたいから	0.56	0.40	0.11
体力をつけたいから	0.44	0.17	-0.04
他の部員との絆を深めていくことができるから	0.32	-0.31	0.08
周りからやれと言われるから	-0.12	0.82	-0.12
周りに結果を求められるから	0.23	0.67	-0.01
練習をしておけば周りから文句を言われたいから	-0.07	0.62	0.17
休んでしまうとみんなに迷惑をかけてしまうから	-0.02	-0.09	0.78
周りに真面目に取り組んでいると思ってほしいから	-0.03	0.09	0.73
固有値	3.33	2.28	1.43
説明率	30.28%	20.75%	12.97%
因子間相関	内発的動機づけ	-0.24	-0.03
	外的調整		0.28

表7. 自律性への欲求の充足に関する質問項目の因子分析結果(因子負荷量)

	自律性
目標や課題を自分で設定している	0.76
練習や試合で試したいことは自分の判断で積極的に行っている	0.74
部活動への参加は人からの強制ではなく自分の意志である	0.64
自分の意見や考えがあるときははっきりと意思表示をしている	0.59
自主練習の時は何をすればよいのか分からない	-0.53
練習メニューは決まっているものなので嫌でも諦めている	-0.44
練習では自分が好きなようにできている	0.42
固有値	3.12
説明率	44.51%

### 有能さへの欲求の充足

調査協力者 74 名のデータを用いて主因子法による因子分析を行った。固有値 1 以上を基準として 3 因子が抽出されたが、プロマックス回転後の因子負荷量を見ると第 3 因子は解釈が不可能であったため、第 3 因子に高い負荷量を示した項目を除外して再度主因子法で因子分析を行ったところ、2 因子が抽出された。プロマックス回転後の因子負荷量を表 8 に示す。

第 1 因子は「運動神経には自信がある」などの身体的有能感に関する項目が高い因子負荷量を示しており、身体的有能感因子と命名した。第 2 因子は「少し難しい技術でも努力すれば習得できる」など統制的な有能感に関する項目が高い因子負荷量を示しており、統制的有能感因子と命名した。

身体的有能感因子に絶対値 0.6 以上の因子負荷量を示す 3 項目の得点の平均を身体的有能感得点とした（「体力には自信がない」は因子負荷量が負の値を示しているため逆転項目として扱った）。また、統制的有能感因子に 0.6 以上の因子負荷量を示す 3 項目の得点の平均を統制的有能感得点とした。

### 部員との関係性への欲求の充足

調査協力者 74 名のデータを用いて主因子法による因子分析を行った。固有値 1 以上を基準として 2 因子が抽出された。プロマックス回転後の因子負荷量を表 9 に示す。

第 1 因子は、「部員から必要とされていると感じる」、「部員に受け入れられている」などの項目が高い因子負荷量を示しており、被受容感因子と命名した。第 2 因子は、「部員といるとリラックスできる」などの項目が高い因子負荷量を示しており、安心感因子と命名した。

被受容感因子に 0.6 以上の因子負荷量を示す 5 項目の得点の平均を被受容感得点とした。また、安心感因子に 0.6 以上の因子負荷量を示す 3 項目の得点の平均を安心感得点とした。

### 部活動への動機づけと心理的欲求との関連

部活動への動機づけの 3 つの尺度得点と、心理的欲求の 5 つの尺度得点についてピアソンの相関係数を算出した。その結果、内発的動機づけ得点と被受容感得点、安心感得点、身体的有能感得点、統制的有能感得点、自律性得点との間に有意な正の相関がみられた。外的調整得点と被受容感得点、

表 8. 有能さへの欲求の充足に関する質問項目の因子分析結果（因子負荷量）

	身体的有能感	統制的有能感
部員の中では運動神経が良い方だ	0.92	-0.05
運動神経には自信がある	0.88	0.01
体力には自信がない	-0.60	0.03
練習を人よりも上手くこなしていると思う	0.49	0.06
少し難しい技術でも努力をすれば習得できる	0.02	0.95
努力さえすれば競技力は向上すると思う	0.02	0.78
出来なかったことでも練習をすれば出来るようになると思う	-0.09	0.71
与えられた課題は必ずマスターできる自信がある	0.29	0.33
固有値	2.80	2.33
説明率	35.05%	29.11%
因子間相関		0.07

表 9. 部員との関係性への欲求の充足に関する質問項目の因子分析結果（因子負荷量）

	被受容感	安心感
部員から必要とされていると感じる	0.77	-0.12
部員に受け入れられている	0.76	0.06
部員から期待されている	0.73	-0.03
部員から心を開かれている	0.69	0.17
部員は私の立場を理解している	0.63	-0.11
部員から相談を持ちかけられる	0.48	0.14
部員は私の意見を尊重してくれる	0.44	0.29
部員といるとリラックスできる	-0.14	0.98
部員は私の話を聞いてくれる	0.02	0.78
部員の前ではありのままの自分を出している	-0.03	0.62
部員と楽しい時間を共有している	0.28	0.46
固有値	5.27	1.27
説明率	47.91%	11.56%
因子間相関		0.66

安心感得点、自律性得点との間に有意な負の相関がみられた。取り入れ的調整得点と心理的欲求に関する5つの尺度得点との間に有意な相関はみられなかった(表10)。

次に、5つの心理的欲求尺度を説明変数、各動機づけ尺度を目的変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、内発的動機づけ得点へ統制的有能感得点、自律性得点、身体的有能感得点から有意な正の標準偏回帰係数が( $\beta = .41, p < .001$ ;  $\beta = .33, p < .01$ ;  $\beta = .23, p < .05$ )見られた( $R^2 = .46, p < .001$ )。また、外的調整得点へ自律性得点から有意な負の標準偏回帰係数が( $\beta = .48, p < .001$ )見られた( $R^2 = .23, p < .001$ )。取り入れ的調整得点については、有意な関連性はみられなかった。

### 心理的欲求が動機づけに及ぼす影響の学年による違い

学年別に各動機づけ尺度と心理的欲求との関連性を分析した。3年生と4年生は人数が少ないため両学年をあわせて分析した。

**学年間の各尺度得点の比較** まず、各尺度の得点が学年によって異なるのかどうか検討した。各尺度得点について学年による1要因分散分析を行ったところ、外的調整得点に学年の主効果がみられ( $F(1, 71) = 3.31, p < .05$ )、3・4年が他の学

年よりも有意に得点が高かった。また、身体的有能感について学年の主効果がみられる傾向があり( $F(1, 71) = 2.65, p < .10$ )、3・4年生が1年生よりも得点が高かった。その他の尺度得点については、学年の主効果は見られなかった(表11)。

### 学年別 動機づけと心理的欲求の充足との関係

学年別に、部活動への動機づけの各尺度得点と、5つの心理的欲求の尺度得点についてピアソンの相関係数を求めた(表12)。各学年ともに、内発的動機づけ得点と自律性得点および統制的有能感得点との間に正の相関がみられ、外的調整得点と自律性得点との間に有意な負の相関がみられた。また、2年生、3・4年生では、内発的動機づけ得点と身体的有能感得点との間に有意な正の相関が見られ、外的調整得点と被受容感得点との間に有意な負の相関がみられた。その他、1年生では内発的動機づけ得点と被受容感得点の間に有意な正の相関がみられ、2年生では、内発的動機づけ得点と安心感得点との間に有意な正の相関が見られた。いずれの学年とも、取り入れ的調整得点と各心理的欲求の充足得点との間には有意な相関は見られなかった。

次に、5つの心理的欲求尺度を説明変数、各動機づけ尺度を目的変数としてステップワイズ法によって重回帰分析を行った。内発的動機づけ得点

表 10. 動機づけと心理的欲求の充足との関連性 (ピアソンの相関係数)

	内発的動機づけ	外的調整	取り入れ的調整
自律性	0.56***	-0.48***	-0.19
身体的有能感	0.29*	0.05	-0.03
統制的有能感	0.56***	-0.21	0.02
被受容感	0.36**	-0.41***	0.03
安心感	0.31**	-0.29*	-0.06

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

表 11. 各動機づけ尺度、心理的欲求の充足各尺度の学年別平均 (標準偏差)

	1年生	2年生	3・4年生
内発的動機づけ	4.95 (0.92)	4.38 (0.93)	4.50 (0.93)
外的調整	2.61 (0.94)	2.65 (0.83)	3.25 (1.13)
取り入れ的調整	3.76 (1.30)	3.71 (0.78)	3.79 (1.33)
自律性	4.36 (0.90)	4.29 (1.00)	4.26 (0.86)
身体的有能感	3.07 (1.29)	3.10 (0.86)	3.71 (1.02)
統制的有能感	4.92 (0.80)	4.75 (0.76)	4.65 (0.54)
被受容感	4.14 (0.55)	4.26 (0.78)	4.15 (0.65)
安心感	4.38 (0.75)	4.62 (0.72)	4.22 (0.94)

表 12. 学年別 各動機づけ尺度得点と各心理的欲求の充足得点との相関係数

	内発的動機づけ			外的調整			取り入的調整		
	1年	2年	3・4年	1年	2年	3・4年	1年	2年	3・4年
自律性	0.45*	0.64**	0.60**	-0.50**	-0.58**	-0.44*	-0.20	-0.08	-0.24
身体的有能感	0.17	0.54*	0.47*	0.16	-0.02	-0.27	0.13	-0.07	-0.26
統制的有能感	0.44*	0.56**	0.75***	-0.24	-0.24	-0.07	0.21	-0.06	-0.24
被受容感	0.50**	0.37	0.29	-0.33	-0.58**	-0.42*	-0.15	0.32	0.03
安心感	0.25	0.61**	0.21	-0.19	-0.31	-0.30	0.07	0.02	-0.22

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

に対しては、1年生については、被受容感、統制的有能感得点から有意な正の標準偏回帰係数が ( $\beta = .42, p < .05$ ;  $\beta = .34, p < .05$ ) 見られた ( $R^2 = .37, p < .01$ )。2年生については、身体的有能感得点、安心感得点から有意な正の標準偏回帰係数が ( $\beta = .52, p < .01$ ;  $\beta = .60, p < .001$ ) 見られた ( $R^2 = .65, p < .001$ )。3・4年生については、統制的有能感得点、自律性得点から有意な正の標準偏回帰係数が ( $\beta = .61, p < .001$ ;  $\beta = .32, p < .05$ ) 見られた ( $R^2 = .65, p < .001$ )。外的調整得点に対しては、1年生 ( $\beta = -.50, p < .01$ )、2年生 ( $\beta = -.58, p < .01$ )、3・4年生 ( $\beta = -.44, p < .05$ ) いずれの学年においても、自律性から有意な負の標準偏回帰係数がみられた (1年生  $R^2 = .25, p < .01$ ; 2年生  $R^2 = .34, p < .01$ ; 3・4年生  $R^2 = .20, p < .05$ )。取り入的調整得点へは、いずれの学年においても有意な関連性は見られなかった。

### 考察

いずれの学年においても、単純相関の結果は、内発的動機づけと自律性が正の相関を示し、外的調整動機づけと自律性が負の相関を示しており、学年にかかわらず、自律性の高低が動機づけを内発的なものにするか、外的なものにするかを規定するものとして働いていることを示している。

また、いずれの学年においても、内発的動機づけと統制的有能感が正の相関を示しており、重回帰分析の結果も、1年生と3・4年生では統制的有能感が内発的動機づけの説明要因となることを示していた。統制的有能感が内発的動機づけと関連していることは、努力や自己向上を重視している日本の文化を背景としているのではないかと考えられるが、この点については総合考察で詳しく論ずる。

関係性への欲求の充足の1つである被受容感については、1年生では内発的な動機づけと正の関係がみられたのに対して、2年生以降では有意な関係がみられなくなっており、植島 (2014) の結果と一致している。また、身体的有能感は、1年生では内発的動機づけと関連性を示していないが、2年生以降では内発的動機づけと正の関連性

を示している。これらのような内発的動機づけと心理的欲求の関連性の在り方の学年による違いについても、総合考察で詳しく論ずる。

### 総合考察

#### 部活動における動機づけに心理的欲求が及ぼす影響

岩崎 (2017) において、単純相関の結果は、内発的動機づけと、自律性への欲求の充足、有能さへの欲求の充足にあたる身体的有能感、統制的有能感、および、関係性への欲求の充足にあたる被受容感、安心感との間で有意な正の相関を示していた。また、植島 (2014) においても、内発的動機づけと関係性への欲求の充足にあたる被受容感、被承認感との間で正の相関が見られた。以上の結果は、内発的動機づけに自律性への欲求の充足、有能さへの欲求の充足、関係性への欲求の充足が関連していると言え、自己決定理論を支持している。

岩崎 (2017) では、自律性への欲求の充足が内発的動機づけを正の方向で説明する要因となっており、また、自律性への欲求の充足は外的調整を負の方向で説明する要因となっていた。これらの結果は、自律性への欲求の充足が動機づけを内発的なものにしたり、外発的なものにししたりする上で強く働いていることを示している。

#### 有能さへの欲求の充足と動機づけ

岩崎 (2017) では、いずれの学年においても統制的有能感が内発的動機づけと正の相関を示していた。統制的有能感は、練習などの努力によって向上できるという有能感である。他の文化との比較が必要なことではあるが、統制的有能感が学年にかかわらず一貫して内発的動機づけと正の関連性を示しているのは、日本文化における努力や自己向上の重視が関係しているのではないだろうか。日本人は成功や失敗の原因帰属を努力に帰することが多い。特に失敗の原因を努力に帰す傾向があることは一貫して認められている。そして、絶え間ない日常的努力により自己向上していくプロセスが文化的に広く共有・是認されている (北

山,1998)<sup>14)</sup>。このような文化的な風土の中では、努力して向上しているという感覚を持つことが内発的動機づけにつながるのであろう。

一方で、身体的有能感は、1年生においては内発的動機づけとは有意な関連性を示していないが、2年生以降では内発的動機づけと正の関連性を示していた。身体的有能感は、その部で行われている活動内容に関して効果的に活動することができるという有能感である。学年が進行し、部の運営に中心的に関わるようになると、その部で行われる活動内容を効果的に行えるという感覚が内発的動機づけに対して重要となってくるのである。

#### 部員との関係性への欲求の充足と動機づけ

植島(2014)でも、岩崎(2017)でも、1年生においては被受容感が内発的動機づけと正の相関を示していたが、2年生以降では関連性が見られなかった。入部をしてまだ間がなく、部活動を継続するかどうか不安定な1年生においては、まず部の中の間人関係において他者から受容されていると感じることが、部活動への動機づけを内発的なものにするのに対して、部活動を継続し、部内での対人関係も落ち着いてきた上級生にとっては、内発的動機づけにとって被受容感は相対的に重要性を失っていくのだろう。

ただ、岩崎(2017)では、2年生以降の学年では、被受容感の低さが動機づけを外的なものにする方向で働いていることが示されている。植島(2014)ではそのような結果が出ていないので一貫した結果ではないが、2年生以降の上級生にとっても、部員から受容されているという感覚が動機づけを外的なものにしないという方向では働いている可能性がある。

#### 学年による違い

2年生以降のデータには1年生の間に退部した人のデータが含まれていないために、1年生と母集団が異なっており、学年間の比較をすることは難しいところがあるが、2つの研究をまとめると、次のことが言えるだろう。

まず、学年にかかわらず、自律性への欲求の充足や、努力をして達成できるという統制的有能感は、一貫して運動系部活動における内発的動機づけをささえている。

入部して間がない1年生の時には、部員からの受容を感じる事が動機づけを内発的なものにしてはいるのだが、部活動をする時期が継続し部内での人間関係が安定してくると、部員から受け入れられているという被受容感の働きが内発的動機づけを促進する働きは減少する。ただし、動機づけを外的なものにすることを抑制する働きは持つ続

け、被受容感の影響は継続しているかもしれない。

また、年数がたち、上級生になると、植島(2014)においては部員との関係性の欲求の1つとしての自己有用感が、岩崎(2017)では有能感の1つとしての身体的有能感が、ともに内発的動機づけと正の関連性を示していた。自己有用感は、自分が他の部員に対して関係性の上で効果的に機能しているかどうかに関するものであり、身体的有能感は、自分が部の活動内容に関して効果的に機能しているかどうかに関するものであると考えられる。上級生となり、部の活動や運営において中心的な存在となる上級生においては、部の活動に関する自分の働き方が内発的動機づけにとって重要になってくるのであろう。

#### 今後の課題

運動系部活動と言っても、個人競技もあれば団体競技もある。また、学生以外の指導者がどの程度部の活動に関与しているかも部によって異なる。本論で紹介した2つの研究はどちらもそういった違いは考慮せず、一括して調査協力者のデータを分析したが、今後はそのような要因の影響も含めて分析を進めていくことも必要であろう。

しかしながら、自己決定理論の立場から、学年の進行とともに内発的動機づけと心理的欲求の充足との関連性がどのように変化し、また変化しないものが何であるのかを明らかにしたことは、本論文で取り上げた2つの研究の功績である。今後、同様の傾向が職場やサークル活動など他の集団における活動においてもみられるのか検討することで、集団への参加の年数を考慮した動機づけを規定する要因の検討をさらに進めていくことができると思われる。

#### 引用文献

- 1) 横山孝行(2013). 大学におけるクラブ・サークルリーダーの類型化の試み. 東京工芸大学工学部紀要, 36, 9-15.
- 2) 日本学生支援機構(2017). 大学等における学生支援の取組状況に関する調査(平成27年度). [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi\\_chosa/\\_icsFiles/afiedfile/2017/02/14/h27torikumi\\_chosa.pdf](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afiedfile/2017/02/14/h27torikumi_chosa.pdf)
- 3) 高木浩人(2006). 大学生の組織帰属意識と充実感の関係. 愛知学院大学論叢. 心身科学部紀要2(増刊号), 61-67.
- 4) Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002). An overview of self-determination theory: An organismic-dialectical perspective. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research* (pp. 3-33). Rochester, NY: University of Rochester Press.
- 5) 落合良行・佐藤有耕(1996a). 親子関係の変化か

- らみた心理的離乳への過程の分析. 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 6) 落合良行・佐藤有耕 (1996b). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化. 教育心理学研究 44, 55-65.
- 7) 岩崎俊 (2017). 大学部活動における動機づけに心理的欲求が及ぼす影響. 島根大学法文学部 2016 年度卒業論文.
- 8) 植島周平 (2014). 大学の部活動における練習への動機づけと対人関係との関連性. 島根大学法文学部 2013 年度卒業論文.
- 9) 錦見朱莉奈 (2011). 青年期における親子関係と学習への動機づけとの関連—女子青年の場合—. 愛知教育大学平成 22 年度修士論文. [https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=5435&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=5435&item_no=1&page_id=13&block_id=21)
- 10) 石本雄真 (2008). 居場所感に関連する大学生の生活の一側面. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2, 1-6.
- 11) 藤田勉・杉原隆 (2007). スポーツ文脈における心理的欲求と動機づけの関係. 学校教育学研究論集, 16, 81-91.
- 12) 伊藤豊彦 (1986). 原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響—スポーツ行動に関する原因帰属モデルの検討—. 体育学研究 31, 263-271.
- 13) 井上寛崇・岡澤 祥訓 (2009). 大学生の体育授業における自律性と運動有能感との関係. 教育実践総合センター研究紀要, 18, 125-130.
- 14) 北山忍 (1998). 自己と感情: 文化心理学による問いかけ. 共立出版.